様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０７９９

研究課題名（和文）幕末維新期儒者たちの動向―木下イ（韋＋華）村日記をてがかりとして―

研究課題名（英文）The diary of Kinoshita Ison of a feudal retainer of the Kumamoto clan: A clue to the trend of scholars of Confucianism in the late Tokugawa period

研究代表者
島　善高（Shima, Yoshitaka）

早稲田大学・社会科学総合学術院・教授

研究者番号：６０１８７４２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、熊本藩の儒者木下イ（韋＋華）村の日記を手掛かりとして、幕末維新期儒者たちの動向を解明することを主眼とした。木下の日記には、幕末期儒者たちのネットワークがかなり詳細に記されている。木下が江戸において親しく交わった安井息軒・塩谷宕陰の二人は、久留米藩の神官眞木和泉守とも交流していた。木下が眞木に会った形跡はないけれども、木下の弟小太郎が眞木と交際しており、眞木は熊本の木下の実家を訪ねてもいる。またこれまでほとんど交渉がないと思われていた佐賀藩の枝吉神陽は、江戸及び熊本で木下に教えを受けていたことも判明したが、枝吉の門弟たちは後に眞木と会って、討幕運動を計画することになる。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the diary of Kinoshita Ison, a scholar of the Kumamoto domain, and the research objective was to look into the activities of the Confucian scholars in the restoration era. Kinoshita's diary reveals a network of academics. For example, Kinoshita was very close to Yasui Sokken and Sionoya Toin when he was in Edo, and there is an evidence of communication between Yasui, Shionoya, and Maki Izuminokami, the renowned anti-Shogunate shintoist of the Kurume domain. The diary does not show whether Kinoshita himself ever met Maki, but Kinoshita's brother, Kotaro, maintained contact with Maki and in fact Maki did make a visit to the home of the Kinoshita family in Kumamoto. Also,we can learn from the diary that Edayoshi Shinyo,a scholar of Saga domain, visited and learned from Kinoshita in Edo and Kumamoto. This fact can be considered as a distant origin of the band of Maki and Edayoshi's followers that plotted against the Shogunate in later years.

研究分野：日本史

キーワード：木下イ（華＋韋）村　熊本藩　安井息軒　塩谷宕陰　文会　時習館

１．研究開始当初の背景

①木下イ（韋＋華）村（犀潭、名は業広、字は子勤、通称宇太郎、真太郎）が幕末の熊本藩で教育に従事し、幾多の子弟を育て上げたことはよく知られている。

②まずイ（韋＋華）村の家族を見ると、次男が京都帝国大学初代総長・木下広次、その子が昭和天皇の侍従次長・木下道雄、イ（韋＋華）村のすぐ下の弟真弘（梅里）は明治時代に官吏となって教部省や内閣修史局に勤め、その下の弟助之は初代県議会議長・玉名郡長を務めた後に衆議院議員となった。助之の次男季吉と三男熊雄は共に東京帝国大学教授であり、助之の孫木下順二は著名な劇作家であった。

③次にイ（韋＋華）門下の竹添進一郎（1842～1917）は、幕末に国事に奔走し、明治政府では大蔵省・外務省に勤務、明治 13 年に天津領事、15 年に朝鮮国弁理公使となった。その後、東京帝国大学で経書を講じ、大正 3 年に帝国学士院賞を受け、文学博士となった。井上毅（1844～1895）は明治時代の法制官僚として余りにも著名で、明治憲法、皇室典範、教育勅語などの原案起草を担当した他、文部大臣になった。古荘嘉門（1840～1915）は、明治 11 年に大阪上等裁判所判事となったが、のち郷里熊本で紫溟会を組織し、国権主義を唱え、明治 23 年に熊本国権党総理となった。そして衆議院議員に 5 回当選し、群馬県・三重県の知事をつとめた後、貴族院議員となった。木村弦雄（1838～1897）は熊本勤王党に属し、維新後、広沢参議暗殺事件にかかわって入獄、明治 22 年尋常中学済々黌校長となり、九州学院の創設に尽力した。以上の竹添、井上、古荘、木村はイ（韋＋華）村門下の四天王と呼ばれている。宮崎八郎（1851～1877）は西南戦争で没したが、宮崎滔天の兄として著名である。

④さらに、イ（韋＋華）村書屋の門人帳によれば、熊本以外からも、久留米 28 人、延岡 14 人、長州９人、小城６人、大村５人、人吉４人、今治２人、岩国２人、佐賀 15 人、柳川 10 人、諫早 10 人、桑名６人、豊後高田５人、島原３人、岡２人、福岡２人、安芸、肥前鹿島、都城、佐伯、松浦、武蔵、信州高遠各 1 人というように、全国各地から優秀な人物がイ（韋＋華）村の塾に集っていた。

⑤応募者の島は、過去 30 年以上、イ（韋＋華）門下の井上毅に関心を抱き続け、井上が起草した皇室典範（日本立法資料全集『明治皇室典範』上下 2 巻、信山社）、明治憲法（「井上毅のシラス論註解」『明治国家形成と井上毅』木鐸社刊、所収）などを研究してきた。その過程で、井上の思想の淵源が一体どこに存したのかを明らかにする必要を覚え、井上の師匠である木下イ（韋＋華）村に次第に注目するようになった。一方、井上が司法省に勤務する切っ掛けを作った鶴田皓（1836～1888、司法官僚、元老院議官）は佐賀出身であるが、幕末、やはりイ（韋＋華）村書屋で学び、井上と同窓であった。その関係で井上は司法省勤務をするようになったのであるが、そもそも鶴田は、どういう理由で木下イ（韋＋華）村の塾で学んだのか、これも究明していと考えていた。

⑥他方、応募者島は、井上や鶴田が司法省に勤務をしていた際の司法卿江藤新平の研究を 10 年ほど行なったが（平成 19 年、科研費報告書『江藤新平関係文書の総合調査』）、その時、江藤の師匠である枝吉神陽の事績を調べたところ（「幕末に甦る律令―枝吉神陽伝―」拙著『律令制から立憲制へ』成文堂刊）、枝吉神陽が佐賀藩士数名を木下犀潭塾へ紹介している事実が明らかになった。

⑦こうして、木下イ（韋＋華）村が幕末の重要人物として浮かび上がってきた。

⑧幸いに木下イ（韋＋華）村の子孫である木下ヨネ子氏や熊本県立図書館、および院生たちの協力を得ることができたので、本研究に取り掛かることにした次第である

２．研究の目的

①本研究を志した頃、木下イ（韋＋華）村の子孫木下ヨネ子氏は、イ（韋＋華）村関係の史料を大量に熊本県立図書館に寄贈された。そこで私は、これを機に、木下家に残されていた幕末期儒者たちの書翰も考察の対象に加え、広く幕末の儒者た動向を探ってみようと考えるに至った。

②木下イ（韋＋華）村は主として熊本で教育に従事し、上記したように多くの学者と交わり、人材を育成していたが、また藩主の侍読として、参勤交代にも従い、江戸勤めをしたことがある。その折、江戸在住の学者たちと「文会」を結成していているので、それを丹念に分析すれば、当時の人間関係、学者の交流の実態、そして学問の内容を窺うことが可能となり、近世史研究者のみならず、思想史研究者にも、有益な情報を提供することになると考えた。

②木下イ（韋＋華）村が育成した幾多の門人は、明治時代になって活躍をしており、彼らについては既に数多くの研究文献がある。ところが、その門人たちの思想の根底には一体何があったのか、それを究明する作業はまだ行なわれていない。木下イ（韋＋華）村には『韡村遺稿』2 冊（竹添光鴻輯、明治 17 年）が残されているが、これは中国の典籍についての論評と詩文が主であって、時勢に関する論評、諸外国への記述はほとんどない。そこで、今回の研究では、犀潭の日記を丹念に読み解き、それによって木下の学問を探ることも目的とした。

③イ（韋＋華）村塾に多数の門人が集ったのは、イ（韋＋華）村が西洋に関する知識を豊富に有していたからが指摘されているが（木野主計『井上毅研究』）、イ（韋＋華）村の西洋学がどの程度のものであったのかは、全く究明されていない。そこでイ（韋＋華）村日記を素材として、イ（韋＋華）村潭の西洋学

を探り出し、それと同時に、犀潭の教育の内容、教育の仕方にどのような特色があったのか、これらの点も解明できればと考えた。

３．研究の方法
①木下の日記をすべて写真撮影した。
②日記以外の書翰、履歴類も可能な限り撮影し、木下家に所蔵されている関連史料も収集した。
③木下を取り巻く環境を理解するため、熊本県史、熊本市史、菊池市史をはじめとする自治体史を収集した。
④永青文庫、熊本県立図書館などに所蔵されている関連史料も収集した。
⑤毎週一回、研究協力者の手助けを得ながら、木下日記解読を行い、それを入力して、『早稲田大会科学総合研究』誌上に年 3 回のペースで掲載した。
⑥木下のご子孫、木下の出身地菊池市在住の郷土史家、熊本在住の近世史家と絶えず連絡を取り合って、教えを乞うた。
⑦木下と交流のあった人物を深く研究するため、久留米の水天宮にもたびたび調査に出かけた。

４．研究成果
①木下日記の翻刻は、天保 11 年から弘化 4 年まで、約 10 年分が完了し、逐次『早稲田社会科学総合研究』誌に発表した。日記全体の半分しか翻刻できなかったが、3 年間という限られた期間、雑誌の発行回数を勘案すれば、まずまず出来であろう。今回の科研費終了後も、継続して翻刻作業を行う予定である。
②本来の目的である幕末期儒者たちの動向について、木下が安井息軒・塩谷宕陰らと文会と称する研究会を開催していたことは知られていたが、木下の日記を丹念に読んでみると、実にいろいろの藩の儒者たちが参加していたことが明らかとなった。また直接文会に出席してはいなくても、久留米藩の神官眞木和泉守が、安井息軒や塩谷宕陰と親しく交わり、木下の弟宇太郎もまた眞木と親しいことがわかった。そこで、久留米の水天宮に所蔵されている眞木和泉守旧蔵史料を調査するためにたびたび調査に出かけ、また同所で行われていた眞木和泉守研究会にも時折出席して、シンポジウムで「眞木和泉守の国家構想」と題して報告した。たまたま眞木和泉守研究会の会員から、佐賀藩の枝吉神陽門下の人々が眞木及びその門下生と親しい関係にあることを教えられ、佐賀県立図書館郷土資料室にも調査に出かけた。調査が進むうちに、当初は想定外であった、木下イ（韋＋華）村と佐賀藩士との関係も次第に明らかになってきた。木下イ（韋＋華）村は、佐賀藩の千住大之助・枝吉神陽・島義勇らと江戸や熊本でしばしば会っていたのである。彼らがどのような会話を交わしていたのか、その詳細な内容がわからないのは残念であるが、しかし、木下日記を手掛かりとして、従来予想もしていなかった人間関係が明らかになり、儒者のネットワークの一端も解明された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 12 件）
①「幕末に甦る律令―眞木和泉守の場合―」、2016 年 3 月、『法史学研究会会報』第 19 号所収
②「眞木和泉守の国家構想」、2014 年 11 月、『眞木和泉守保臣先生没後百五十年記念誌』所収
③「木下イ（韋＋華）日記」（八）－③、『早稲田社会科学総合研究』16（2）、2016 年 3 月
④「木下イ（韋＋華）日記」（八）－②、『早稲田社会科学総合研究』16（1）、2015 年 12 月
⑤「木下イ（韋＋華）日記」（八）－①、『早稲田社会科学総合研究』15（3）、2015 年 3 月
⑥「木下イ（韋＋華）日記」（七）、『早稲田社会科学総合研究』15（2）、2014 年 12 月
⑦「木下イ（韋＋華）日記」（六）、『早稲田社会科学総合研究』15（1）、2014 年 7 月
⑧「木下イ（韋＋華）日記」（五）、『早稲田社会科学総合研究』14（3）、2014 年 3 月
⑨「木下イ（韋＋華）日記」（四）、『早稲田社会科学総合研究』14（2）、2013 年 12 月
⑩「木下イ（韋＋華）日記」（三）、『早稲田社会科学総合研究』14（1）、2013 年 7 月
⑪「木下イ（韋＋華）日記」（二）、『早稲田社会科学総合研究』13（3）、2013 年 3 月
⑫「木下イ（韋＋華）日記」（一）、『早稲田社会科学総合研究』13（2）、2012 年 12 月

〔学会発表〕（計 6 件）
①「幕末に甦る律令―眞木和泉守の場合―」2015 年 11 月 13 日、法史学研究会、明治大学
②「眞木和泉守と枝吉神陽の国家観」2015 年 6 月 21 日、佐賀偉人伝編纂委員会・討論会「白熱する佐賀と久留米、白熱する尊王論」、佐賀城本丸歴史館
③「木下イ（韋＋華）と菊池」2015 年 5 月 10 日、知道会・教育講演会「文教菊池の再興を願って」、菊池市文化会館大ホール
④「眞木和泉守の国家構想」2013 年 7 月 21 日、眞木和泉守研究会「シンポジウム・眞木和泉守の思想をたずねて」、久留米大学
⑤「熊本藩時習館における礼律論議―嘉永六年十一月「宮川兄弟処分一件」を手がかりとして―」2013 年 6 月 1 日、熊本史学会、熊本県立図書館
⑥「熊本藩における礼律論議―眞木和泉守の法律学瞥見―」2013 年 4 月 24 日、法史学研究会、明治大学

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
島　善高　（SHIMA,Yoshitaka）
早稲田大学・社会科学総合学術院・教授
研究者番号：60187424

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
雲藤　等　(UNDOU,Hitoshi)
片岡剛毅　(KATAOKA,gouki)